六華の心

酒田市立第六中学校
学校だより　第４０号
校長　齋藤　啓悦
令和３年１月１９日

自然に「あいさつ」ができる人に…

ＰＴＡ育成部、三役の皆さんからご協力をいただき、年3回、**朝のあいさつ運動**を実施しています。１月13日（水）～15日（金）までの3日間、今年度最後のあいさつ運動を行いました。**ご協力**をいただいた皆さん、**ありがとうございました。生徒会**や**部活動**、**学級単位**でもあいさつ運動を行っています。あいさつが飛び交うと**一日が気持ちよくスタート**できます。ぜひ続けたい活動です。

今は新型コロナ対策のため、**マスク**をしているので表情が見えず、声も聞こえづらくなっています。そうした中でも校内を回っていると廊下で会ったら**会釈（少し頭をさげる）**をしてくれたり、「**こんにちは**」と**進んであいさつ**をしてくれたりする生徒もいて、**心が和みます**。ただ、朝の様子は、進んであいさつをしてくれたり、あいさつを返してくれたりする生徒はもちろんいますが、自分からはなかなかできない生徒もまだまだいます。素通りされることもあり、さすがにこれは**残念な気持ち**になり、**心が凹みます**。

自分からあいさつをする（声の大きさはその場に応じて）、これに**会釈**が加わると必要十分です。**学校でも地域でも、目線と気持ちを相手に向けて自分でできるあいさつ**から行ってくれることを望みます。

柔道では「**礼に始まり、礼に終わる**」という言葉があります。スポーツの世界だけでなく、社会の中では**あいさつは基本的なマナー**であり、**お辞儀**などは**日本人の美徳**でもあります。**自然にできる**、習慣として**当たり前にできる**、**そんな大人になってほしい**と思います。

「命」「生きる」を考える ～阪神・淡路大震災から26年～

今から２６年前の１９９５年１月１７日、「阪神・淡路大震災」が発生しました。近年は自然災害も多く発生するようになりましたが、東日本大震災以前では甚大な被害を及ぼした天災でした。新年を迎えたとき、大震災の翌年の元日の新聞に載っていた「**新年は死んだ人をしのぶためにある**」で始まる詩をいつも思い出します。死んだ人のために自分は何をしてきたか、これから何ができるのか…。「命」「生きる」「家族」についてなど考えることがたくさんあります。どの学校に行っても一度は「学校だより」等に載せるようにしています。ご一読ください。（以下は、１９９６．１．１付け朝日新聞「天声人語」から）

新年は死んだ人をしのぶためにある、／心の優しいものが先に死ぬのはなぜか、／おのれだけが生き残っているのはなぜかと問うためだ▼おおみそかに、いつもこの詩を思い出す。中桐雅夫の「きのうはあすに」である。詩を思い出し、阪神大震災の記録を、また読み返してみる。これまでにわかっているだけで、死者は六千三百八人に及ぶ（その後の関連死を含めると六千四百名以上になる）▼夫も妻も、下敷きになった。手を握りあって、助けを待った。夫の声が、聞こえた。「おれは駄目かもしれへん。子どもたちを頼む―」「いい人がいたら一緒になれよ―。三途の川を渡るなよ―。」救助されたが、夫は死亡。四十一歳▼がれきの山の中から、三歳の娘の泣きじゃくる声がした。かぶさるように、「パパがもうすぐ助けるよ」と、三十三歳の父親の声がした。救出活動をしていた人が、娘を抱きかかえている父親の姿、すき間から確認した。やがて、父親の声が絶えた。娘も、病院に運ばれる途中、亡くなった▼最初の揺れが去ったあと、いくつもの地区が、火に包まれた。七十三歳の父親が、下半身をがれきに挟まれていた。子どもたちが両手を思い切り引っ張った。炎が迫った。父親は、おだやかに言った。「もう行け、もう行け」▼かわいがっていた孫を失った八十一歳の女性は、以来、持病の薬をのまなくなった。孫の葬儀後、急速に衰弱した。「足手まといになって悪いな」ともらした。地震のあと、半月足らずで、孫のあとを追った▼だれもが、心優しい人たちだった。果てしない記録を読み、そして、亡くなった人たちのために自分はなにをしたか、これから自分になにができるか、問うてみる。詩は、こう結ばれている▼きょうはきのうに、きのうはあすになる、／どんな小さなものでも、眼の前のものを愛したくなる、／でなければ、どうしてこの一年を生きていける？